

「馬鹿者を命ず！」

第二十三回 まちおこしに暗雲その二 渋谷和宏

イラスト ● 丹下京子

喜多嶋翔 (きたじま・しょう) 25歳、西朱雀プロジェクト社員、悠太の1年先輩。

小笠原一徹 (おがさわら・いつてつ) 22歳、日下部地区の生産者。元暴走族のリーダー。

広岡卓次 (ひろおか・たくじ) 49歳、地域おこし協力隊員として東京から伊予南市に移住したが……。

名女川直行 (なめかわ・なおゆき) 27歳、麻衣の会社員時代の先輩で彼氏。麻衣を追いかけて……。

亀田太 (かめだ・ふとし) 29歳、元伊予南市役所・地域振興課員。

登場人物

石打悠太 (いしうち・ゆうた) 25歳、主人公。商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

青山麻衣 (あおやま・まい) 24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。

ショーン・次川 (つぎかわ) 45歳、アメリカの投資ファンド、ヴィンセント・ファンド副社長。

新庄誠人 (しんじょう・まこと) 39歳、元伊予南市役所・地域振興課長。

「僕」

がやりましょう」

名女川が言った。

「ホームページ、僕が作りましますよ。皆さんの話を聞いていたらやってみたいくうずうずしてきました。動画を使ったり、クイズ形式のキャプションを入れたりして、ホームページにアクセスしてくれた人が『ぜひ伊予南フェアに行ってみたい！』と思うようなページにしてみせます」

「ちょっと待ってよ！ 名女川さん、休みは一週間だって言っていたじゃない。今度の水曜日には東京に戻って出社しなければいけないって言っていたじゃない」

麻衣が唇を尖らせた。

「そのことなら会社に連絡して有休を延ばしてもらおうよ。これまでほとんど有休を取らずに働いてきたんだ。きっと大目に見てくれるさ」

「そんなことを言っているんじゃないの！ 名女川さんは『せめて一日だけでもここに

小笠原は一升瓶をテーブルにどんと置いた。
喜多嶋の悲鳴で悠太は我に返った。
いつの間にか眠りに落ちていたのだった。
悠太は部屋を見回した。

すでに宴たけなわで、麻衣と新庄がどこから探し出してきたのか名女川のギターで昔のフォークソングを歌っている。
その向こうでは喜多嶋が小笠原にサソリ固めをかけられ、悲鳴を上げながら手のひらで畳を叩いている。
喜多嶋がまた気に障ることを言ってしまったのか、それとも小笠原がただ嗜虐の喜びを味わっているだけなのか、いずれにしても喜多嶋が心配していた通り、小笠原はあまり良い酒飲みではなさそうだ。
「疲れているみたいだな」

広岡だった。

「あ……いえ、何だか最近やたら眠いんです。夜ぐっすり寝ているのに昼間も気がついていたらウトウトしていたりして……」

「それはすっかり伊予南の人間になったってことだな。この土地に完全になじんだんだよ。お前、ここにやってきたばかりのころは夜、よく眠れなかったんじゃないか？」
「ええ……そう言えば……」

「俺も一緒だったよ。しばらくはちよつと

した物音でも目を覚ましてしまうんだ。初めての土地でどこか緊張していたんだろうな。それがいつの間にかぐっすり眠れるようになって、それまでの睡眠不足を取り戻そうとするかのように一時期、寝まくっていたよ。飲むか？」

悠太は広岡がコップに注いでくれた日本酒を飲んだ。

日本酒のことはよくわからないが、きりつとした味わいながら豊かな風味もあり、いくらでも飲めそうな気がする。

「美味いだろ？ 伊予南の地酒の『伊予南の海』だ。こいつも伊予南フェアに出そうと思っっているんだよ」

「広岡さん、アルベルゴ・デイフーズをご存知だったんですね」

「何の話だ？」

「収穫体験とかホテルの観賞とかの体験ツアーを企画して都会から旅行者を呼び込み、古民家に泊まってもらおうアイデアです。それって伊予南市を一つのホテルにしようというアルベルゴ・デイフーズの発想ですよね」

「まあ……確かにそういうことなんだけけどね」

広岡はコップ酒を飲んだ。

「イタリアやフランスの村でアルベルゴ・デイフーズの考え方をまちおこしに生かそ

前回のあらすじ

悠太は、古民家再生を進める守屋良子から伊予南市への協力を取り付けた。悠太の帰りを待って伊予南フェアの関係者が集まった。ショーン・次川の過去を調べた榎は、伊予南出身で市への復讐心があると指摘する。

いさせてくれよ』と言ったのよ？ それが『実は一週間の有休を取ったんだ』とか言ってるすると居座って、いったいつまでここにいる気なのよ！ ねえ、悠太、あなたからも言ってみよ。』ととと出て行ってくれ』って」

「そうは言っても名女川さんの力があれば、きつといいホームページができるだろうし……」

「でしよう？」

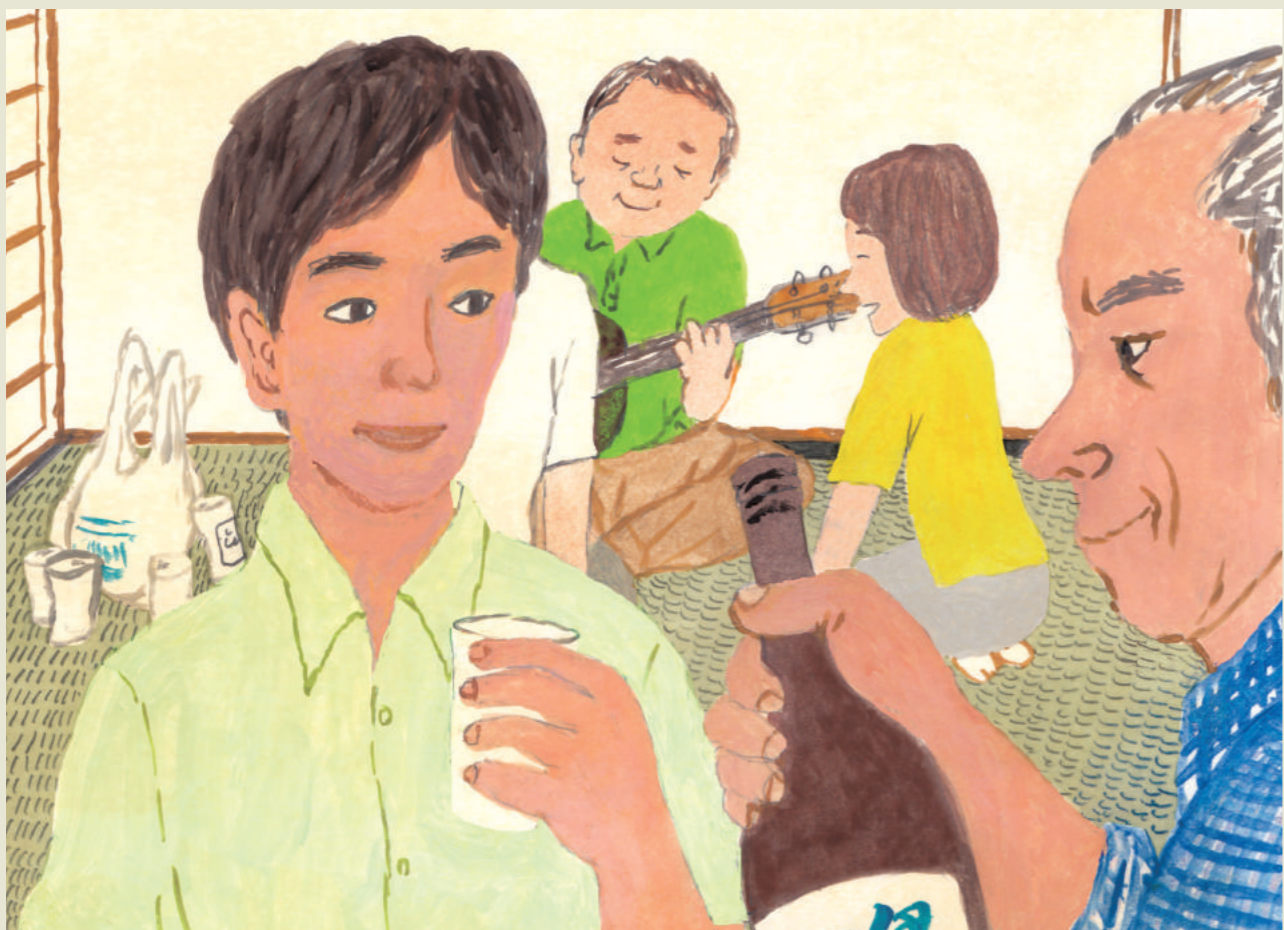
名女川は得意げな笑みを満面に浮かべた。「麻衣、石打さんがそう言ってくれるんだからさ。もうしばらくここにいさせてくれないかな」

「麻衣って呼ばないでよ！」

「まあ、そういうわけだ」

小笠原が口を挟んだ。

「伊予南フェアと伊予南のまちおこしに向けて、今日は関係者が集まったんだ。成功を祈念して乾杯といこうぜ！」



うとしてゐる動きがあるのは知っていたよ。ただ俺が古民家に泊めたらいいと思いついたのは、せつかく素晴らしい家があるのもったいないじゃないかと単純に感じたからなんだ。ヨーロッパに做おうとかそんなことは考えなかったよ。それに俺は村や町を一つのホテルにするだけじゃ不十分だと思っているんだ」

悠太は先をうながすように広岡を見つめた。

「村や町を一つのホテルにして旅行者を宿泊させ、地元イベントに参加してもらったり土地の食材を味わってもらったりするのは確かにいいことだよな。村や町は旅行者で賑わうし、お金も落としてくれる。でも旅行者は結局、通り過ぎていく人たちだ」

広岡は遠い目をした。

「俺はどうかして伊予南にやって来てくれた人たちを、何度でも繰り返し訪ねてくれるリピーターにしたいんだよ。さらにリピーターの中から、ここに移り住んでくれる人たちが出てくれるようにしたいんだ。俺にとっては、そこまでいかないと本当のまちおこしとは言えないんだよ」

「移住者を呼び込みたいんですね？」

「まあ高いハードルだよな」

広岡は苦笑した。

「俺自身が東京からの移住者だから、移住

者を呼び込みたいと思うんだろうが、ここがどんなにいいところだとしても、決め手になるような魅力やきっかけがなければなかなか決断できないよな」

「決め手になるような魅力やきっかけ……広岡さんは何が決め手だったんですか？」

「お前にはまだ話していなかったか……。

俺はただ会社での仕打ちから逃げ出したかったんだよ。地獄のような毎日をチャラにして、新しい場所でやり直したかったんだ。だから本当のことを言えば移住先はどこでもよかったんだ。四国でも九州でもな。でも、皆が皆、俺みたいなわけじゃないだろう？ それどころかほとんどは何かもっと前向きな理由があるはずだよな」

榎太一のもとを辞したション・次川は二名島バッテリー本社工場の駐車場に停めていたベンツに乗り、伊予南駅の裏手にあるビジネスホテルに戻った。

狭い浴室でシャワーを浴び、ラコステのポロシャツにヌーディージーンズというラフな格好に着替える。

しみつたれた窮屈なビジネスホテルには一分一秒でも長居したくないとばかりにホテルを出た次川は、駅前の飲食店街へと足早に歩いていった。

飲食店街の中ほどにある大衆居酒屋はカ

「そ……それだけです。当たり前じゃないですか」

亀田は顔を逸らした。

「僕にはどうにも信じられないなあ。もしかして、あなたは内心ではこの町を憎んでいるんじゃないやありませんか？」

名女川のギターに合わせて麻衣と新庄が歌うフォークソングの輪は今や小笠原や喜多嶋にも広がっていた。

広岡も地酒を飲みながら手拍子を打っている。

悠太は座を離れ、事務所に入って東京の西朱雀プロジェクトに電話を入れた。

すぐに花咲かえでが電話口に出た。時刻は午後八時を回ったばかりだから、西朱雀プロジェクトではまだ宵の口なのだ。

「石打くん、順調？」

「ええ、何とか。ところでかえでさん、あなたか都会から地方に移住した人を知りませんか？」

「移住者の知り合い？ あたしにはそういう人は……ちょっと待って、四分地さんに聞いてみるわ」

電話が保留に切り替わり、しばらくして通話に戻った。

「ようやくプロジェクトが前に進み出したみたいだな」

ウンターも小上がりもほぼ満席で、ガラス戸を開けた次川に客たちのざわめきや焼き鳥のにおい、タバコの煙がいつぺんに降りかかってきた。

一瞬顔をしかめるが、すぐに平静さを取り繕い、ふつくらした小柄な男がカウンターの隅で飲んでいるのを見つけた。

次川は男が確保してくれていた隣のスツールに腰を下ろした。

「待たせて悪かったね」

「いえ、どうせ暇ですから」

男——元伊予南市役所・地域振興課職員
の亀田太は顔を歪めた。笑ったらしいが、怒っているようにも見える。

次川はビールと焼き鳥の盛り合わせを注文した。

大衆居酒屋とか一杯飲み屋の類は安っぽいというえに騒々しくて好みではなかったが、こんな小さな町では料亭の個室で会おうものならすぐに噂になってしまう。

一方、人の出入りが激しい大衆居酒屋では、誰が誰と飲んでいようが店主も従業員も他の客もほとんど気にせず、しかもうるさいので会話の内容が洩れる心配もない。小さな町では料亭より安っぽい店の方が実は密談に向いているのだ。

「それで？ 亀田さんの会社の伊予南プロジェクトでは最近、何か新しい動きはあり

四分地だった。

「移住者の知り合いならいるぞ。俺の社会人講座の教え子で、東京の大手通信会社を辞めて香川県の小海島に移り住んだ男がいるんだ。年齢は三十七、八歳だったかな」

「あの……その人にお会いさせていただくことはできますか？」

「ああ、それはお安いご用だが、会ってどうするんだい？」

「なぜ移住したのか、都会での仕事や生活に区切りをつけ、地域に移り住む決断をした決め手は何だったのか、きっかけとか魅力を開いてみたいんです」

「もしかして、伊予南市で移住者を呼び込もうという動きが出てきたのか？」

「いえ……具体的な動きは何も……ただある人が『旅行者は結局、通り過ぎていく人たちだから』と言ったのを聞いて、それが何だかともうなづけると言うか……」

「わかった。その男に連絡を取ってみるよ」

「あ……ありがとうございます」

悠太がそう言うよりも早く、四分地は電話を切った。

翌朝、かえでからの電話で悠太は目を覚ました。時刻は午前九時近い、何と十時間以上も爆睡してしまったのだ。
畳部屋には喜多嶋が横たわっているだけ

ましたか？」

「ええ、まちおこしのプロジェクトがいよいよ始まりましたね。来月、東京の西朱雀地蔵通り商店街で伊予南フェアを開くんです。その後も伊予南市の食べ物とかを商店街で売るそうですよ」

店員がビールを持ってきた。次川は自分のグラスと亀田のグラスにビールを注いだ。「ああ……それから古民家を改装して、都会から来た人たちが宿泊できるようにすると社長の新庄は言っていました」

「つまり伊予南市としてまちおこしに本格的に力を入れようというわけですね」

「はい、新庄はそう言っていましたね。いよいよやりますからって」

次川はビールを一口飲み、真顔で亀田を見つめた。

「亀田さん、あなたはこの町を好きですか？」

亀田が唐突な質問に少し驚いた顔をした。「前回、食事をした時、あなたは器物破損で書類送検されましたと打ち明けてくれましたよね。それで伊予南市役所を諭旨解雇処分になってしまったとも教えてくれた。その直接の動機は東京からやってきたまちおこし特命社員を何とか追い出したかったからだと言っていました、そんな真似をした理由は本当にそれだけですか？」

で、広岡も新庄も小笠原ももちろんいない。昨晚帰ったのだから寝ていてまったく気づかなかった。

「寝ていたの？ 石打くん、寝起きの声よ」

「何だかいくらでも眠れるんです」

「出口栄さんという方、今週はいつでも大丈夫だって」

「え!?」

「四分地さんの社会人講座の教子で小海島に移住した人よ。昨晚、四分地さんがメールを送ったら今朝返事が届いていて、『今週はほとんど事務所か店にいますのでいつでも訪ねてきてください』って」

「お店って……?」

「四分地さん、出口さんの略歴と連絡先を石打くんにメールで送ったそうよ。それはそれとして、いきなり都会から地方への移住者に会いたいなんて、どういう風の吹き回しなの?」

「実はずっと頭の中に引っかかっていることがあって……それが気になって仕方がないんです」

「何が引っかかっているの?」

「それが何と言うか……何だかよくわからないんです。もやもやしているというか漠然としているというか……」

「何よ、それ」

かえでが言う通り、昨晚遅くに四分地か

らのメールが届いていた。

出口栄、三十八歳、大学卒業後、大手通信会社のD K K I社に入社し、営業や経営企画の仕事に携わっていたが、三年前、D K K Iを退職し、小海島でオリーブの栽培やオリーブ製品の製造・販売、カフェ、レストランの運営などを手がけるシマウミソラ社に転職して家族とともに小海島に移住した。

現在はシマウミソラ社で新規事業開発を担当している――。

悠太はできるだけ早く出口栄という男に会いたくなった。

D K K I社と言えば誰もが知っている大企業で、携帯電話の契約者数では確か国内第二位のはずだ。その社員だったのだからエリートサラリーマンだと言っているだろう。

その立場と収入を捨ててまで移住を決意させた決め手とは、いったい何だったのだろうか?

悠太は小海島への行き方を調べた。

小海島へは高松港から直行便のフェリーや高速船が出ている。日中は一時間に二本の便数だ。

伊予南市から高松港までは高速道路を使えば二時間ちょっとで行かれるだろう。

「善は急げ、だよな」

悠太はシャワーを浴び、小海島行きのため

たを始めた。日帰りにするか一泊するかは出口さんに会ってから決めようと考え、着替えもリュックサックに入れた。

「何しているの?」

麻衣がいぶかし気な目で悠太を見つめていた。

寝起きの顔だ。今しがた目を覚まし、二階から下りてきたらしい。

「もしかして、また東京に行くの?」

「違うよ。小海島だよ」

「小海島ってオリーブオイルとか醤油で有名な島よね? 何しに?」

「仕事だよ。東京からの移住者に会いに行くんだ」

「あたしも行くわ」

「ちょっと待ってくれよ」

「あたし、もうこれ以上、名女川さんと一緒にいたくないの。あの無駄にデカいのを相手にするのも嫌になったの。したくすから待っていてよ」

麻衣は無言を言わない視線で悠太をにらみつけ、きびすを返した。

いびきをかいている喜多嶋に「小海島へ東京からの移住者に会いに行きます」と書き置きを残した悠太は、麻衣のしたくが終わるのを待って事務所兼社宅を出た。

麻衣を助手席に座らせ、ラパンのエンジンをかける。

麻衣がしたくをしている最中にとつとと出発する手もあつたけれど、そうする気にはなれなかった。

――もしかして、僕はまだ麻衣に未練があつて、小海島への小旅行への途中で、何か起きるのをどこかで期待しているの

だろうか。つい先日、薫子と尾花市に出かけてときめいたばかりだというのに……。「何だかよりを戻したみたいね」

麻衣が悠太の気持ちを見透かしているみたいにならずに小僧のような顔をして笑った。

「仕事だから」

「まあね。でも楽しみだわ。あたし、小海島って一度行ってみたかったの。映画の舞台にもなったのよね? 何ていう映画だったっけ?」

麻衣は思い出そうと努めたが、結局、映画のタイトルは出てこず、諦めて鼻歌を歌い始めた。

悠太は海沿いの国道を徳島自動車道へと目指した。そこから高松自動車道に入り、高松中央インターで下りれば高松港は目の先の先はずだ。

「悠太、あたしのこと怒っているよね?」
悠太は無言でうなずいた。



Kazubiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト

大正大学表現学部客員教授。1959年12月、横浜市生まれ。

日経BP社で『日経ビジネス』副編集長、『日経ビジネスアソシエ』創刊編集長、

『日経ビジネス』発行人などを務めた後、

2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー

『錆色(さびいろ)の警鐘』(中央公論社)で作家デビュー。

TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。

まちおこし特命社員
石打悠太
馬鹿者を
命ず!